

北海道日本海沿岸地域における考古学的調査 (2001 年度)

高橋 健¹⁾・福田正宏²⁾・佐藤昌俊³⁾・笹田朋孝¹⁾・川島尚宗²⁾・塚本浩司¹⁾

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科¹⁾

〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学大学院歴史・人類学研究科 (人文社会科学研究科)²⁾

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院新領域創成科学研究科³⁾

General Surveys of Archaeological Sites along and off the Western Sea Coast of Hokkaido, 2001

Ken TAKAHASHI¹⁾, Masahiro FUKUDA²⁾, Masatoshi SATO³⁾,
Tomotaka SASADA¹⁾, Takamune KAWASHIMA²⁾ and Hiroshi TSUKAMOTO¹⁾

Graduate School of Humanities & Sociology, the University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8654, Japan¹⁾

Institute of History & Anthropology (Institute of Human & Social Sciences), University of Tsukuba,

1-1-1, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8571, Japan²⁾

Graduate School of Frontier Sciences, the University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8654, Japan³⁾

Abstract. This is the second report of the general surveys of the archeological sites along and off the western sea coast of Hokkaido. The investigation in Tomari village, on the west side of the Shakotan peninsula, was executed in November of 2001. In prehistoric times, this area was an important passage for the trades along the Sea of Japan. While archaeological finds which belong to the Jomon, Epi-Jomon and Edo period were obtained in seven open sites, no new sites could be found. This area is characterized by cave sites, fourteen of which were surveyed. While no archaeological finds could be obtained in these cave sites, some of the sites seem to be promising for future archaeological excavations.

はじめに

1999 (平成 11) 年から着手した北海道日本海沿岸地域における考古学的調査は今年で 3 回目をむかえた。2000 年度までは道北地域の島嶼群 (利尻・天売・焼尻) と天塩川河口部で一般調査を実施した (福田ほか, 2002)。その結果として、先史時代において海づたいの対外交渉が調査した地域群を拠点として行なわれていたことが、徐々にではあるが、明らかになってきた。

2001 年度は積丹半島西部に位置する泊村内で一般調査を実施することにした (第 1 図参照)。

積丹半島西部における遺跡・遺物の記載の初出と

考えられるのは、松浦武四郎など江戸後期の探検家による記録である。明治期にはいつて吉田東悟や河野常吉による記載も散見できるようになるが (吉田, 1891; 河野, 1905), 調査報告としての体裁をなした研究は 1933 (昭和 8) 年の名取武光による洞穴遺跡とそこから出土した刀剣などの遺物の紹介からはじまったといえる (名取, 1933)。その後、地元の岩内郡と古宇郡で発足した岩宇 (いわう) 郷土研究会による調査研究により、茶津洞穴遺跡群や東山円筒文化遺跡など、今日、著名になっている遺跡の存在が明らかになった。これらの精力的な活動は、積丹半島東部で江戸末期からすでに確認されていた

忍路環状列石や手宮洞窟など、全国的にみても極めて珍しい遺跡の存在に触発されたものといえる。

泊村内の考古学的遺跡については、岩宇郷土研究会や名取の調査を引き継いだかたちとなった小樽市博物館などの洞穴遺跡の調査によって全国的に有名となった。また、1984（昭和59）年に本格着工された北海道電力株式会社による泊原子力発電所建設にともなって数多くの行政発掘調査が行なわれており、渡島半島から日本海に突出した積丹半島のつけ根が先史時代から海づたいの接触と交渉の重要な拠点となっていたことがさらに浮き彫りになってきた。なお、泊村における考古学的調査・研究の歴史については、野村（1992など）、竹田（1984）による整理、紹介があるため、ここで深く触れることはしない。

一般調査を泊村現地で実施するにあたり、大谷武史、田部淳、森田忠知、吉田玄一の各氏による様々な御協力を頂戴した。また、旭川市立博物館、泊村教育委員会、ほくでん原子力PRセンター、北海道教育委員会、東京大学総合博物館、東京大学附属常呂実習施設の各機関にも温かい御支援をいただいた。

本報告のための整理作業は現地調査参加者一同で行なった。本報告を発表するのにあたって、上記の各位に加えて、宇田川洋、内山幸子、内山真澄、熊木俊朗、諏訪元、瀬川拓郎、谷田有史、西谷榮治、野村崇、原祐一、前田潮の各氏による御指導と御助言をいただいた。

各項の文責はそれぞれ末尾に明記した。編集は高橋と福田、英文は高橋が担当している。（福田）

1 泊村内における一般調査

(1) 調査の概要

泊村においては、北海道教育委員会（1983）によって原子力発電所建設にともなう埋蔵文化財包蔵地所在確認調査が1981・1982（昭和56・57）年に行なわれているため、遺跡の分布は比較的良好に把握されているといえる。このときに確認された遺跡は31ヶ所であったが、現在は若干の新発見の遺跡が追加され、北海道教育委員会作成による埋蔵文化

財包蔵地カードには33ヶ所の遺跡が登録されている。これらは開地遺跡と洞穴遺跡に分けられるが、泊村においては後者の洞穴遺跡の数が多いことが、大きな特徴といえよう。

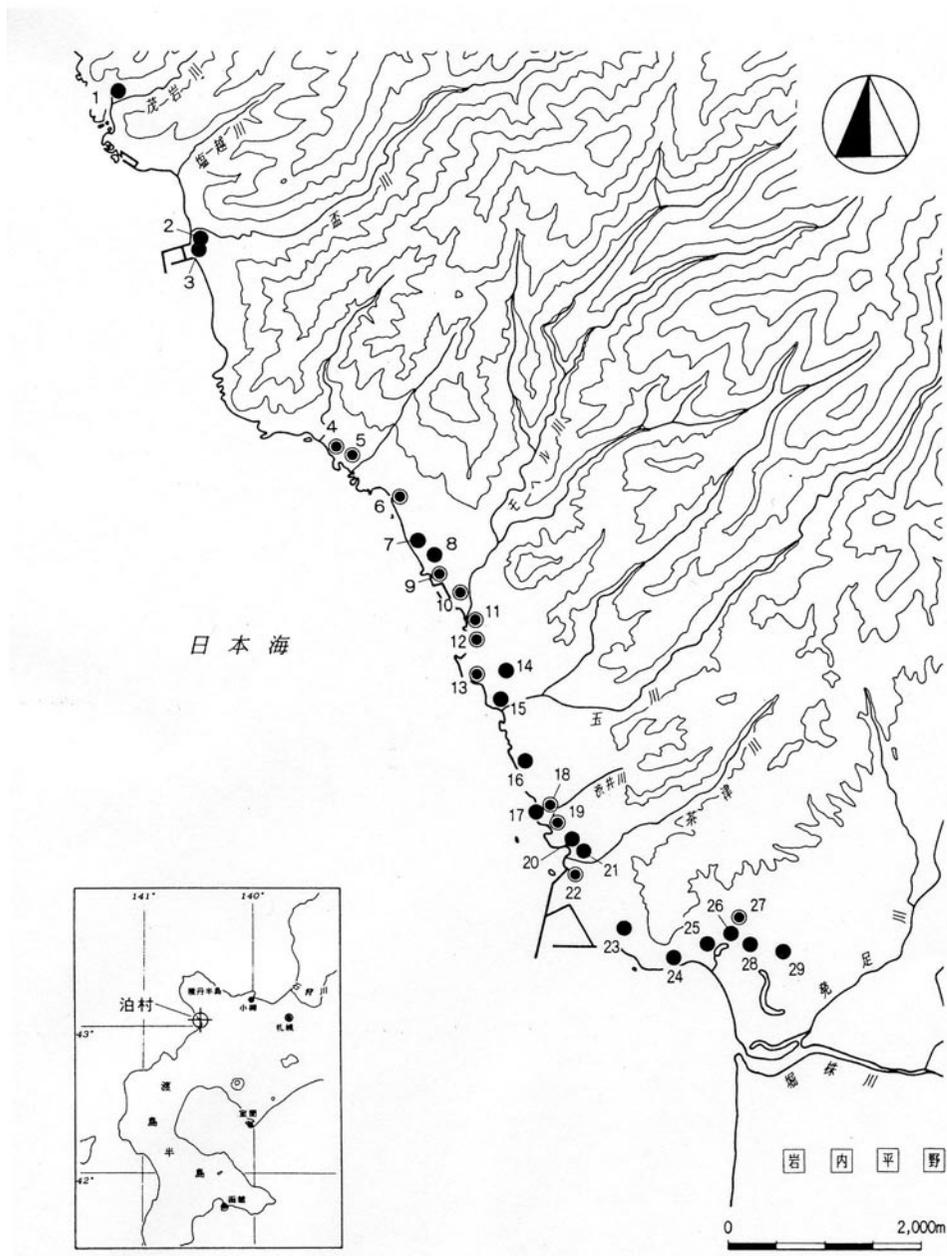
現在知られている開地遺跡の多くは村の南部に集中しており、我々の調査が行なわれた2001年度においても堀株1遺跡、滝ノ潤遺跡で発掘調査が行なわれていた。一方、村の北部では遺跡の分布が薄い。急峻な崖が海岸に迫っており沢筋の平坦地もせまいため、一般調査を行なう余地が非常に限られていた。今回の調査では、それぞれの沢筋ごとに道教委に登録された遺跡の地点を中心として表面採集を試みた。その結果8ヶ所の地点で遺物を採集することができたが、新たな遺跡を見つけることはできなかった。

前述したように、泊村においては洞穴遺跡が多く知られているが、これは積丹半島の地形的な特徴にくわえて、丹念な分布調査が行なわれたことに起因すると考えられる。積丹半島の洞穴遺跡については古くから注目されてきたが、近年も北海道開拓記念館によって研究が進められるなど、考古学的関心を集めている（右代ほか、1992；北海道開拓記念館、2002）。ただし、泊村の洞穴遺跡のなかで本格的な発掘調査が行なわれているのは、照岸洞穴と茶津洞穴群だけであり、考古学的には内容が不明なものが多い。そこで、今回の一般調査においては、これらの洞穴遺跡とその周辺の踏査を行ない、洞穴遺跡の位置の確認と現状の簡単な計測を行なうことにした。残念ながら遺物の表面採集は不可能であったが、将来の考古学的調査のための候補地として有望な遺跡の存在を確認することができた。

泊村現地での一般調査は2001（平成13）年11月5日～11日に行なった。調査参加者は、高橋、福田、佐藤、川島、笹田である。（高橋）

(2) 地形と環境

泊村は積丹半島南西部の根本部分に位置しており、植生はブナを含まない落葉広葉樹林帯に属する。村の大半は山地で占められており、山裾から海岸までは海岸段丘が形成されるが、海岸部は急峻な波蝕



第1図 泊村内における各遺跡の分布 (●は開地遺跡、●は洞穴遺跡)

1. 茂岩貝塚, 2. 盃1, 3. 盃2, 4. 兎洞穴, 5. 照岸洞穴, 6. 糸泊洞穴, 7. 汐見橋, 8. 泊, 9. 稲荷神社下洞穴, 10. モヘル洞穴, 11. 有戸洞穴, 12. 白別洞穴, 13. 茅沼洞穴, 14. 白別高台, 15. 茅沼, 16. 滝ノ澗, 17. 渋井貝塚・渋井, 18. 渋井洞穴, 19. 茶津1～4号洞穴, 20. 茶津チャシ, 21. 茶津, 22. 茶津5号洞穴, 23. ヘロカルウス, 24. 堀株神社, 25. 堀株1, 26. 堀株2, 27. 龍神沢洞穴, 28. 堀株3, 29. 堀株4

崖になっている部分が多い。そのため、現在の集落は海岸線および小河川下流のわずかな平坦部に形成されている。しかし、村の南端に位置する堀株地区は、堀株川によって形成された平坦地であり、ほかとはやや環境が異なる。

泊村には鯨御殿や袋澗、鯨番屋などのニシン漁の痕跡が色濃く残っており、古くから漁業を中心として栄えたことがわかる。現在ではイカ・サケ・ホッケ・カレイの沿岸漁業に加えて、ウニ・アワビの栽培漁業も行なわれている。また明治期以降は、その豊富な地下資源の存在から茅沼炭坑がひらかれ、隆盛を極めた。炭坑は現在では閉山しているが、北海道電力発電所が建設され、今日においても道内におけるエネルギー需要の重要な役割をになっている。

泊村内における先史遺跡の立地は三つに分けられる。まず山裾から続く緩やかな海岸段丘上で、この場合沢沿いが多い。つぎに河川下流域の平坦部があげられる。以上は開地遺跡である。最後に、この地域の自然環境に適応した独特な立地条件をそなえる洞穴遺跡があげられる。洞穴は様々な標高の段丘崖面にあり、新第3紀泊累層カプト火砕岩層（ハイアロクラスタイト）を基盤とした海食洞である（山岸，1979；右代ほか，1992）。

遺跡立地とその利用時期の関係をみると、標高の高い台地上に縄文時代の遺跡、河口周辺などの低地に続縄文期以降の遺跡が存在する傾向がある。おもに、洞穴遺跡は縄文時代後期～晩期および続縄文期～擦文期初頭の二つの時期に利用されたようだ。貝塚を形成し墓域として利用したとみなされる例が多い。また、続縄文中頃からは祭祀的な利用が強まることが指摘されている（右代ほか，前掲）。

そのほか古環境を含めた泊村に関わる積丹半島の環境については、地質や動植物、第4紀の気候変化などの研究は北海道開拓記念館（1992）による成果がある。植生については平川（1992）によってもまとめられている。また、堀株神社遺跡で確認された2枚の汀線地形面からは3世紀前後と5世紀前後の小海進が考えられている（石橋，1996）。

（佐藤）

（2）開地遺跡

北海道教育委員会で2001年度現在、埋蔵文化財包蔵地として登録しているすべての遺跡を踏査したが、現状では表面採集できず、範囲が明らかでない遺跡も存在した。ここでは、遺物採集ができたか新知見の得られた遺跡に限定してとりあげることにする。なお、遺跡ごとに、埋蔵文化財包蔵地調査カードに記されている登録番号をそれぞれ付記した。（福田）

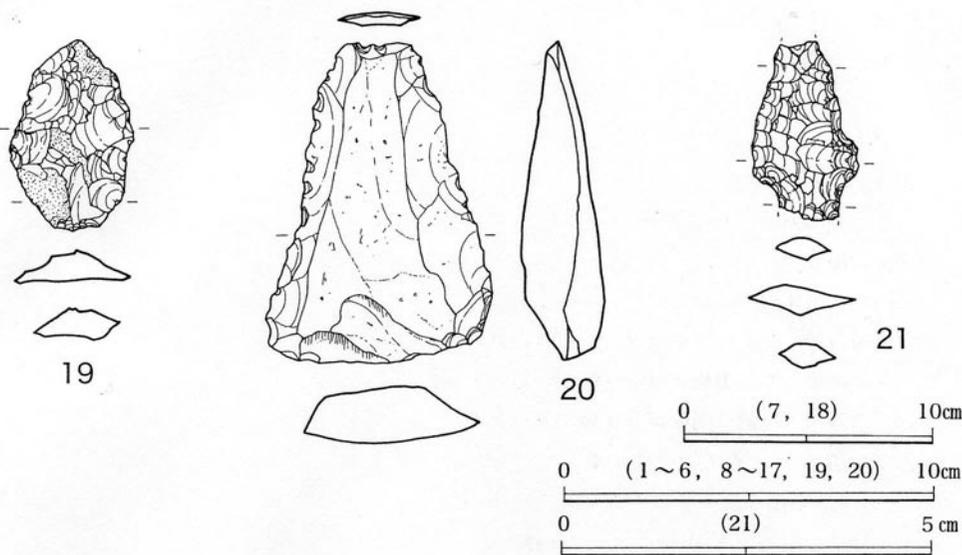
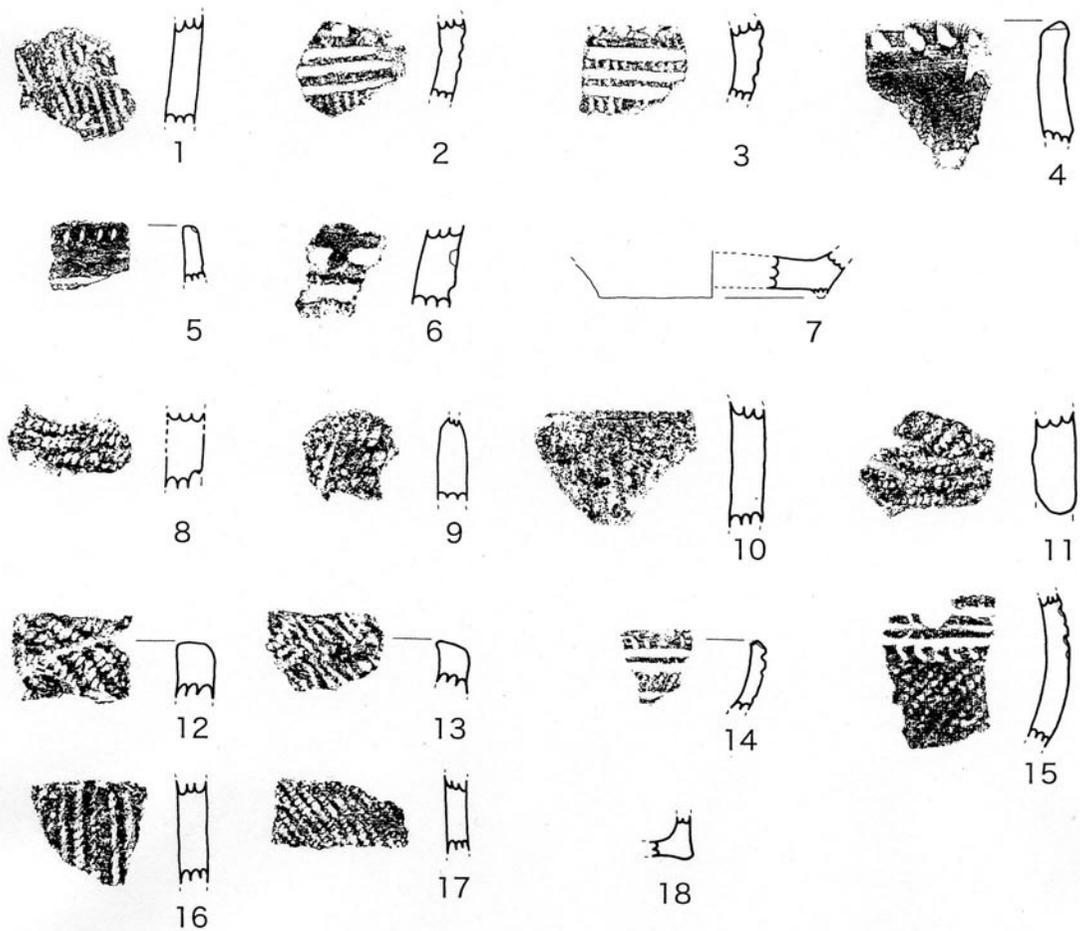
① 盃地区

盃1遺跡（登録番号：D・14・18） 大字盃村160-1ほか、に所在し、現況は宅地・畑地となっている（第1図2）。盃川左岸の海岸砂丘上標高約8mに立地する。過去の一般調査では、縄文時代晩期の土器片とフリイクが採集されている（北海道教育委員会，1983）。今回表面採集した遺物は、国道229号線沿いの畑地から得られたものである（第1図1～7）。また、遺跡地図に記載された範囲外ではあるが、盃1遺跡の南隣に位置する畑からも若干の遺物が採集できたため、盃1遺跡の拡張した範囲内として報告する。採集した遺物は、縄文時代晩期のほかに続縄文期の恵山式期のものも含んでいる。

第1図1には縄文が施されている。2・3では横位に3条の平行沈線が引かれ、その上部には刺突または縦位の沈線文があり、下部にはRLの縄文が施文されている。恵山式期初頭のものと考えられる。4は口縁部片で、口唇部上面にキザミをもち、頸部に横位の沈線が施される。沈線の上部には一部にRLの縄文が認められる。5も口縁部片であり、口唇部外面に細かなキザミがつけられ、その下には横位の浅い沈線が引かれている。6では深い横位の沈線が施されるが、沈線の一部は途切れている。7は底部片である。底部径9cmで高台状を呈しており、恵山式と考えられる。石器としては黒耀石製のフリイクを数点採集した。（川島）

② 泊地区

泊地区の遺跡は、天狗山の裾野から緩やかに傾斜する海岸段丘上に確認されている。多数の沢が台地



第2図 採集遺物 (1)

盃(1~7), 汐見橋(8~9), 泊(10~11・19), 茅沼(12~18・20~21)

を開析し、200～300m幅の舌状台地を形成している（泊村教育委員会，1999）が、踏査時に沢ははっきりと確認できず、舌状台地の様相も確認できなかった。

汐見橋遺跡（登載番号：D・14・22）大字泊村字糸泊315-1～4に所在する（第1図7）。遺跡は緩やかな海岸段丘上に位置し、沢状の地形が一部で残っている。発掘調査では縄文時代の堅穴住居・ピット群および近世建物跡などが検出された。おもに縄文時代早期～中期の遺物が出土している（泊村教育委員会，1999）。この発掘地点から少し離れるが、泊消防団第2分団の道をはさんだ海側の畑で遺物の採集をした。採集遺物は、単節縄文の施された土器胴部片4点・陶磁器片・黒耀石フレイク2点・頁岩フレイク1点である（第2図8・9）。土器片の時期は小破片のため不明だが、縄文時代中期のものか。陶磁器片は近世末期以降のものと思われる。（佐藤）

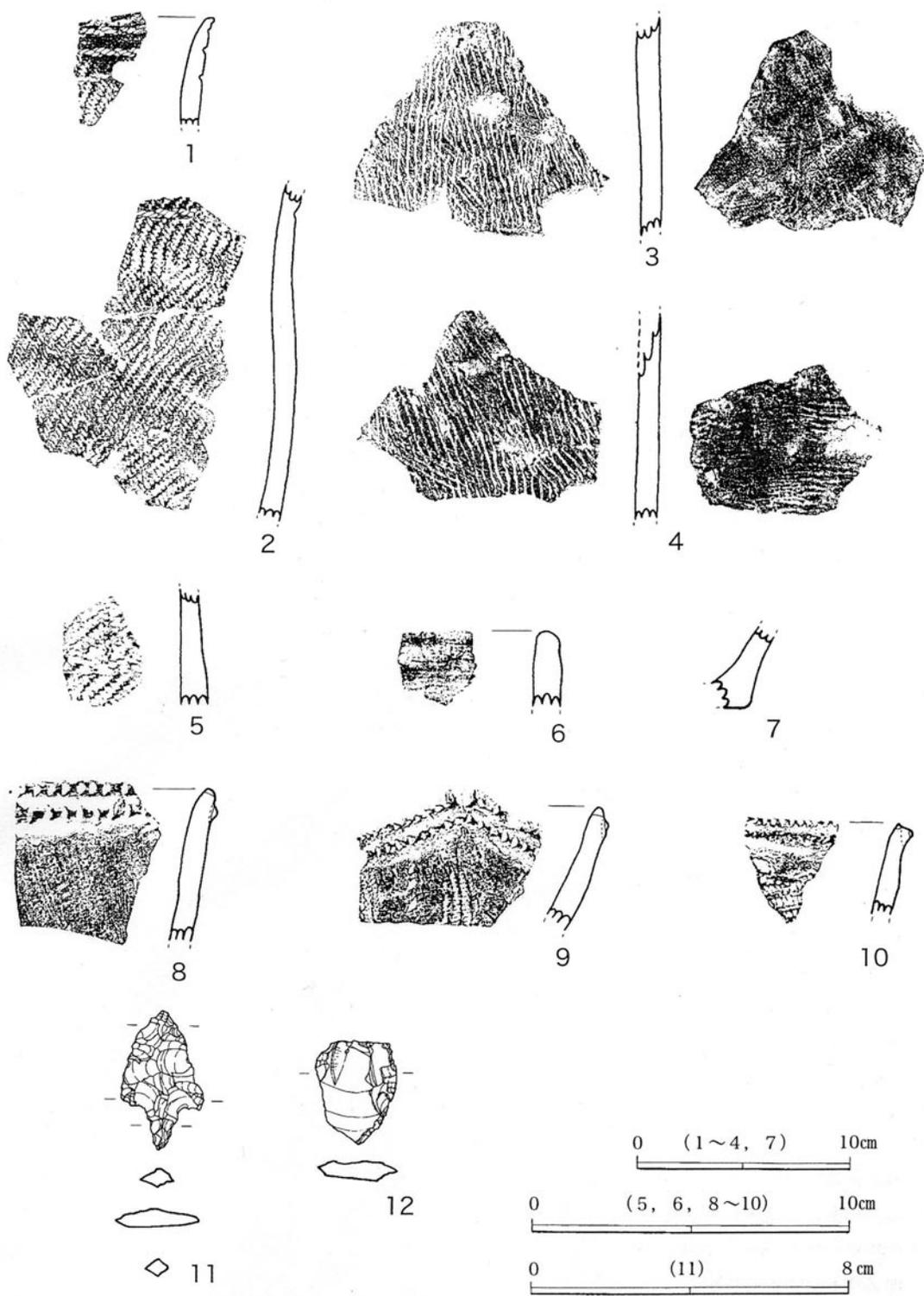
泊遺跡（登載番号：D・14・23）大字泊村59, 73-1ほか、に所在する（第1図8）。1981・1982年の一般調査によって発見された遺跡である（北海道教育委員会，1983）。海蝕崖に近い緩やかな海岸段丘斜面に存在する。海岸沿いの道と国道229号に接する住宅にはさまれた畑地で遺物を採集した。南側の畑地はやや谷地形を呈していたが、宅地造成が進んでおり現在は地形が不明瞭となっている。第2図19は黒耀石製のポイントで、原石からの一次剥片の素材形に調整を加えたものである。表面には原石面が一部のこり、裏面には剥離面に微調整が施されている。全体的に粗雑なつくりである。ほかに多くの黒耀石製のフレイクやチップ、数点の頁岩製フレイクを採集した。黒耀石は赤井川産のものとみられる。土器は、単節の回転縄文が施された胴部片5点と頁岩製のフレイク3点を採集した。第2図10・11の土器胴部片はおそらく縄文時代中期のものだが、詳細は不明である。（佐藤・福田）

茅沼遺跡（登載番号：D・14・30）大字茅沼村119-1・2, 216-1・2に所在する（第1図15）。玉川の右岸標高約5mの砂丘上に位置している。包蔵地として登録された地目は宅地のみであるが、恵比寿神社下の畑地および恵比寿神社や公民館が建つ段丘上でも遺物の散布を確認することができた。地元住民からの聞き取りによると、この段丘上で過去に多くの遺物を採集できたとのことである。そのためこの散布地はかなり広範囲に広がる可能性がある。今回の調査では、この段丘上で石器1点と頁岩製のチップをごくわずかに採集するにとどまった。この散布地は登録されている茅沼遺跡とは明らかに立地が異なるため、茅沼遺跡の範囲に含めるべきでないのかもしれない。

従来の茅沼遺跡の包含地範囲内で採集した遺物として、第2図12～18・20を恵比寿神社下の畑、同図21を恵比寿神社のある段丘上の畑で採集した。12～18は土器片である。12・13は口縁部破片で、ともに口唇部に回転縄文の施文がみられる。12は平坦口縁、13は波状口縁をもつ深鉢の一部である。ともに縄文中期ないしは後期初頭のものか。14は小型鉢の口縁部破片。15は口縁部の欠けた深鉢の胴上半部片である。15には沈線内にキザミが連続して施され、補修孔がある。ともに縄文時代晩期前葉のものだろう。16・17は縄文土器の胴部破片であり、16には捺糸文、17には横位の回転縄文が施されている。17の下縁は輪積痕で破損している。18は土器底部片で磨耗が著しい。20は篋状石器で、裏面には原石面がのこる。表面は刃部以外に二次剥離はみられない。未製品か。21は黒耀石製の両面加工の石鏃で、茎部と先端部が欠損している。左側縁にはノッチが1ヶ所みられる。茎はやや太めでややいびつな形態をなす。

白別高台遺跡（登載番号：D・14・26）大字茅沼村字白別東山ノ上82-3ほか、に所在する（第1図14）。標高約60mの海岸段丘上に位置しており、現状は畑地となっている。今回、遺物の採集をすることはできなかった。茅沼遺跡と同様に、この遺跡も範囲は登録されているより広域におよぶ可能性がある

③ 茅沼地区



第3図 採集遺物 (2) 渋井貝塚 (1~7), 堀株 1 (8~12)

る。登録されている茅沼遺跡の北側に位置する段丘上の散布地の詳細とともに、今後それぞれの包蔵地の関係も明らかにする必要があるといえる。(福田)

④ 渋井地区

渋井地区で登録されている遺跡としては、集落内の渋井遺跡と集落北側にある段丘上の渋井貝塚の2ヶ所がある。また後述するように、渋井貝塚の立地する段丘の南斜面において洞穴を確認した。

渋井貝塚(登載番号:D・14・27) 大字堀株村字渋井北山の上5-3ほか、に所在する(第1図17)。渋井川右岸の標高約20~30mの海岸段丘上に位置している。渋井貝塚については、照岸洞穴の発掘調査報告のなかで渋井の隧道上にある貝塚として報告されている(千代, 1965)。それによれば、渋井貝塚には余市式・後北式の土器片が散布していたという。また、渋井貝塚から約150m東に余市式と円筒下層式の土器片が散在している場所もあったとも述べられているが、正確な地点はわからない。その後の一般調査では、縄文時代後・晩期の土器片と剥片が採集されたようである(北海道教育委員会, 1983)。

今回の遺物の採集地点は海岸沿いに走る国道229号をみおろす段丘の縁の部分であり、測量用杭の周辺に土器片がある程度集中して地表面に露出していた。杭の設置工事にともなって露出したものと考えられる。現在、段丘上の畑は耕作されておらず、貝殻などの散布も確認できなかったが、過去の記述もあわせて考えると、遺跡は段丘上にかなりの広がりをもっている可能性が高いといえる。

第3図1・2は同一個体と考えられる。口縁部にかけてわずかに外反する深鉢で、口縁は波状を呈するらしい。地文はLRの単節斜縄文であり、口縁部には同じ原体による3条の縄側面圧痕文を施文している。内面にハケメ状の調整痕がみられる。3・4はそれらとは別の同一個体の胴部片と考えられる。地文は1の撚糸文であり、内面にも施されている。また、内面には赤色物が塗られている。5はやはりLRの単節斜縄文が施された胴部片であるが、

原体の閉端がみられる。

渋井遺跡(登載番号D・14・9) 大字堀株村字渋井127-3~6, 129ほか、に位置する(第1図17)。1984年に地域集会所の建設にともなう発掘調査が行なわれている。これによれば、縄文時代晩期中葉を中心として続縄文・擦文期におよぶ時期の遺跡であり、茶津隧道から集会所にかけて広がっているとされている(泊村教育委員会, 1985)。今回遺物を採集した地点は泊製甲所東隣と集落最奥部の畑であり、いずれも、従来知られていた遺跡の範囲より渋井川に近く、また、上流側に位置している。しかし、1984年の調査範囲においては厚さ1m近くにおよぶ盛土がなされており、現在の平坦面が埋め立てによるものであることが確認されているため、今回の遺物採集地についても本来の遺跡の位置であるかを慎重に検討する必要がある。ただし、渋井遺跡の範囲が従来知られていたより、さらに広がる可能性があることは指摘できよう。

第3図6・7は渋井集落内、泊製甲所の東隣の畑から採集した。それぞれ、無文の口縁部と底部の破片である。ほかにも、集落最奥部の畑から無文の口縁部片を1点採集した。(高橋)

⑤ 堀株地区

堀株1遺跡(登載番号:D・14・8) 泊村大字堀株村8番の1ほか、に所在する(第1図25)。標高5~10mの堀株川旧河口の右岸砂丘上に形成され、その後背には標高40mほどの河岸段丘がひかえる。1982・1983・2001年に発掘調査が行なわれている(北海道文化財研究所, 1992)。その砂丘の西端には堀株神社遺跡が所在する(第1図24)。同遺跡の範囲内にあたる堀株集落内の畑で縄文時代~近代にわたる土器・石器などの遺物が散見された(第3図8~12)。

8~10は続縄文期の深鉢の口縁部片である。8の口縁は緩やかな波状を呈する。尖った断面の口唇部と口唇直下の微隆起線文上にキザミが施される。9の口縁は波状である。縦位にRLの帯縄文、その間の無文帯には三角列点文列が施される。キザミの

ある口唇部の断面形態は尖り、口唇直下の微隆起線文上にはキザミが施される。後北 C₂-D 式とみられる。10 の口縁はゆるやかな波状を呈する。口唇部の断面は外剥げ状の三角形で、口唇直下の微隆起線文と同様にキザミがみられる。RL の帯縄文が横位に施されている。石器としては 11 の五角形の有茎石鏃がある。両面から調整がなされており、基部を明らかにつくりだしている。12 は二次加工のあるフレイクである。右側縁に腹面側からリタッチがはいり、左側縁は折損している。(笹田)

(4) 洞穴遺跡

現在、北海道教育委員会によって遺跡として登録されている泊村内に所在する洞穴遺跡は計 14 ヶ所ある。今回の踏査ではそれにもとづき、さらに過去にいくつかの文献で洞穴遺跡として記録されたものについても再確認した。その結果、文化層が洞穴の内部および前庭部に存在する可能性のある遺跡と、土層の堆積がまったくみられず遺跡としての認定が著しく困難な遺跡に現状で分けられることがわかった。以下にそれぞれについて踏査記録を列挙するが、とくに、すでに発掘調査が行なわれた洞穴、遺物の出土が報告された洞穴、そして文化層が存在する可能性のある洞穴については、村役場で保管している地籍図をもとに詳細な周辺の地形図を新たに作成し、それをあわせて報告することとした。

① 兜洞穴 (登載番号: D・14・20) 大字泊村字照岸に所在する (第 1 図 4)。海岸に面してやや突出する崖の下、海面とほぼ同じレベルで南に開口する。雨垂れラインでの幅は 480cm で、そこからの奥行きは 560cm、最奥部での幅は 250cm である。左壁が 400～500cm 手前に張り出す。高さは著しく高いため、計測不可能であったが、800cm とされている (右代ほか, 1992)。両側壁先端部の最大幅は約 800cm。かつて舟置場として使用されていた痕跡がある。床面は砂礫に覆われており、文化層は確認できなかった。

② 照岸洞穴 (登載番号: D・14・7) 大字泊村字

照岸に所在する (第 1 図 5)。国道下の崖下標高 4.0m の地点に、海に向かって西に開口する (第 4 図参照)。入口部の幅は 830cm、入口部から 230cm 奥に雨垂れラインがあり、そこでの高さは 290cm ある。洞穴の平面形は、左側にやや張り出す扇形である。左壁先端部から最奥部までの奥行きは 1060cm。内部床面は土に覆われており、奥部では自然崩落が著しく進んでいる。前庭部には背丈以上の草が生い茂っていて、開口部左側に岩陰が付属している。過去に舟置場として使用されていた形跡がある。

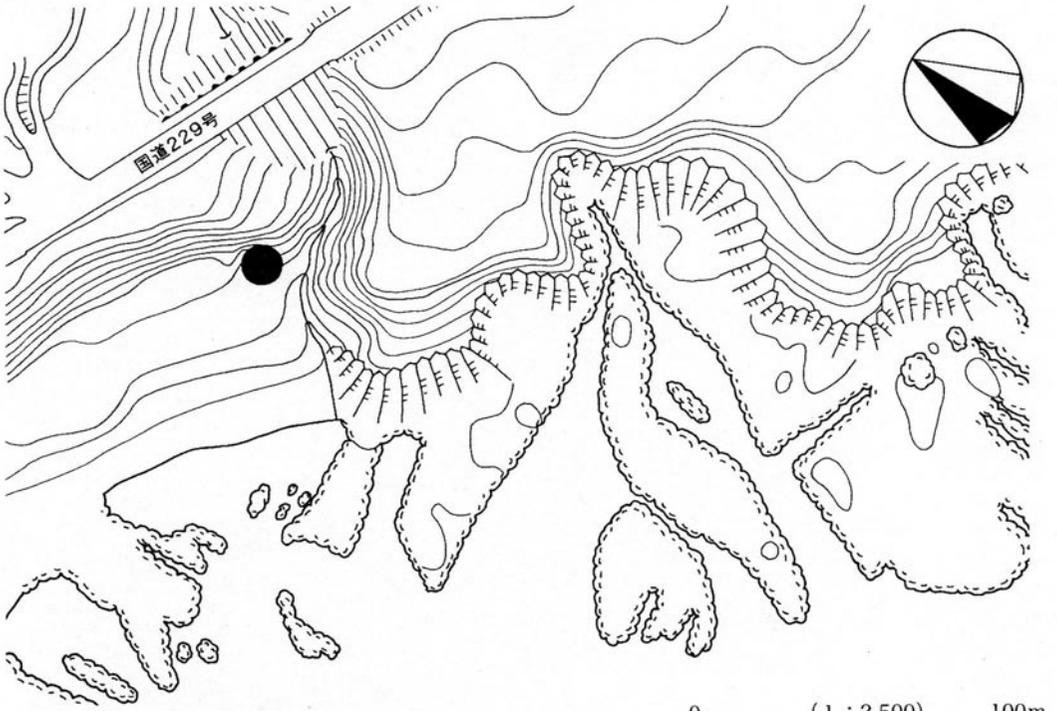
当洞穴では同志社大学と小樽市博物館による発掘調査が行われている。千代肇 (1965) によれば、包含層から出土した土器は縄文時代後期後葉、同晩期前葉～中葉、統縄文前半期、擦文期初期のものであり、ほかに土師器も若干出土したようである。

またこの洞穴から北西 30 m ほど離れた地点に小さな貝塚、また海岸沿いに 100 m ほど南に「メノコオトシ」もしくは「コオモリ穴」と呼ばれた洞穴遺跡らしきものが存在したようだが (同前)、今回はそれらを確認していない。

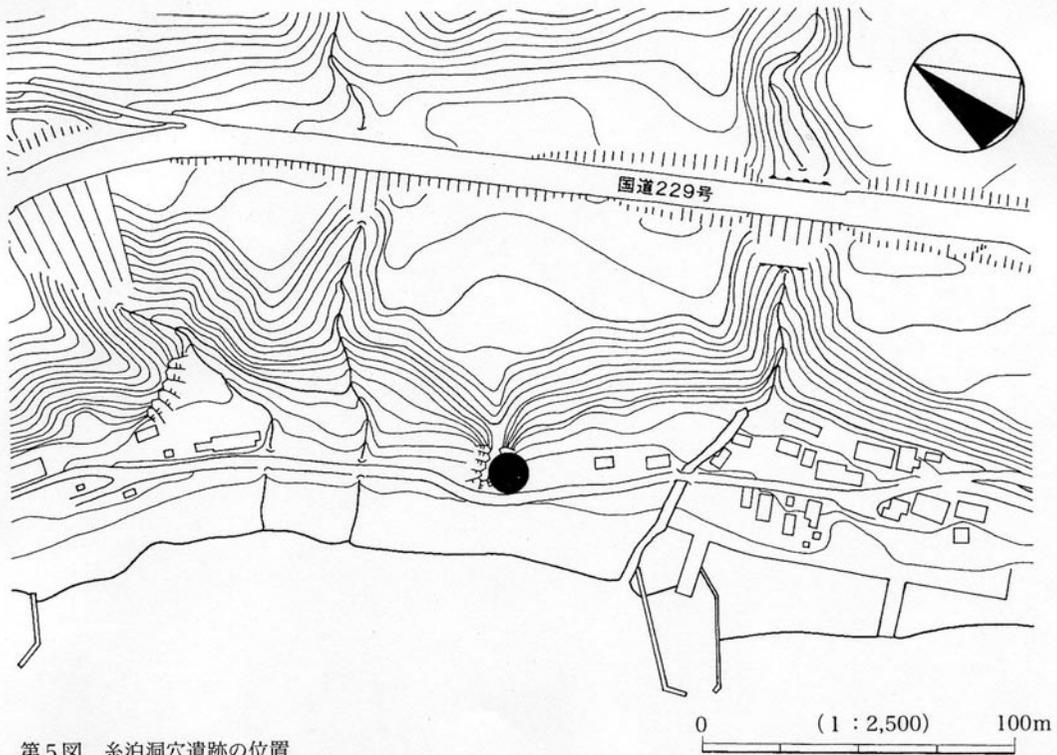
③ 糸泊洞穴 (登載番号: D・14・21) 大字泊村字糸泊に所在する (第 1 図 6)。突出した崖下で、海に向かって南に開口する (第 5 図参照)。入口部の幅は 900cm、天井は高さ 300cm でやや庇状に張り出す。雨垂れラインからの奥行きは 470cm ある。平面形は歪んだ半月形。内部床面は岩肌が露出しており、崩落が著しい。文化層と考えられる堆積土層はみられないが、前庭部は草が繁茂しており、文化層が存在する可能性は否定できない。かつては資材置場として使用されていた。

④ 稲荷神社下洞穴 (登載番号: D・14・31) 大字泊村山の上に所在する (第 1 図 9)。海に面した崖下で西に向かって開口する。双子洞穴であるが、ここでは北側を 1 号、南側を 2 号として報告する。

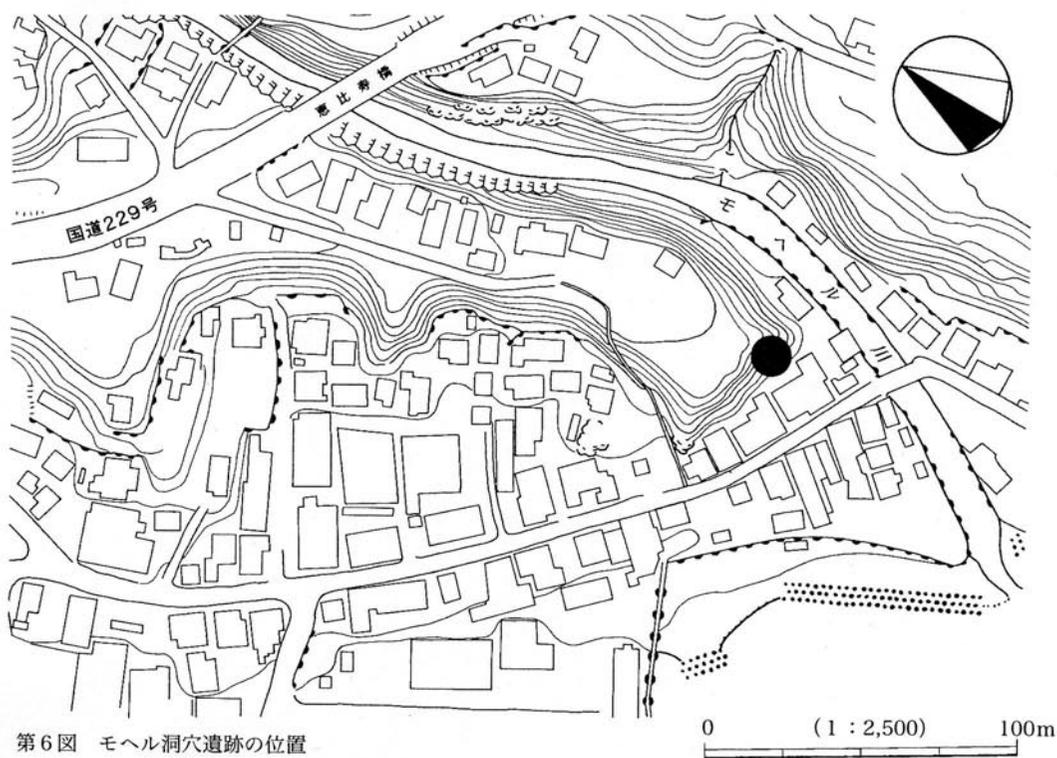
1 号: 入口部の幅は 430cm で、そこから雨垂れラインまでは 540cm ある。天井は中央部でへこんでおり、先端部での幅は 140cm、高さは極めて高く計測不可能であったが、500cm とされている (右

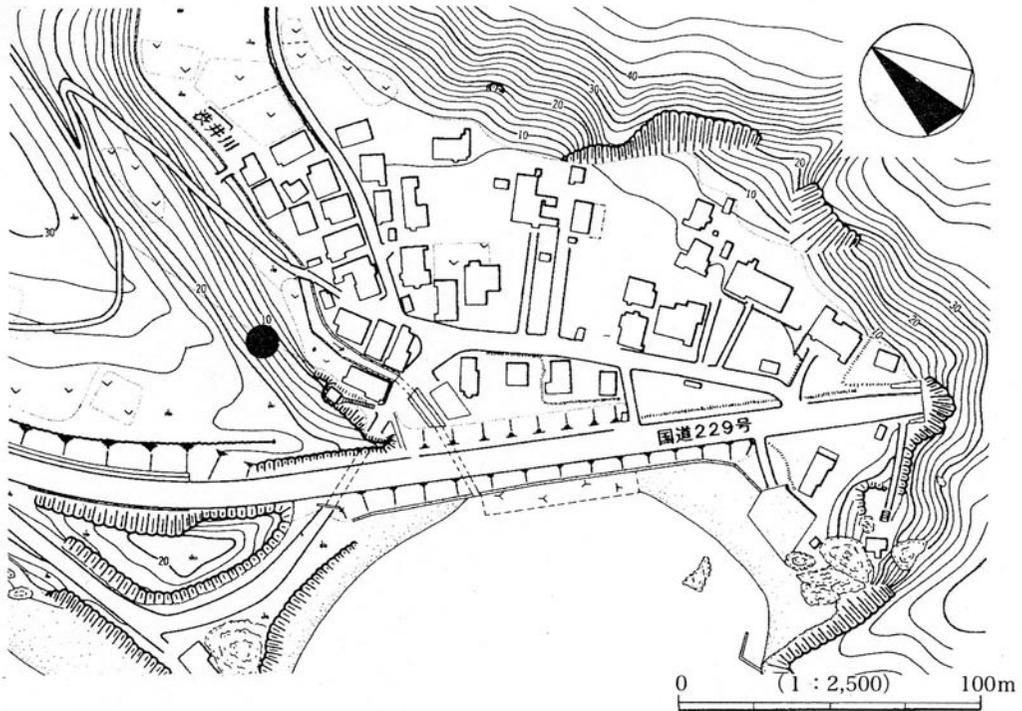


第4図 照岸洞穴遺跡の位置



第5図 糸泊洞穴遺跡の位置





第8図 渋井洞穴遺跡の位置 内山編(1985)第2図を一部改変

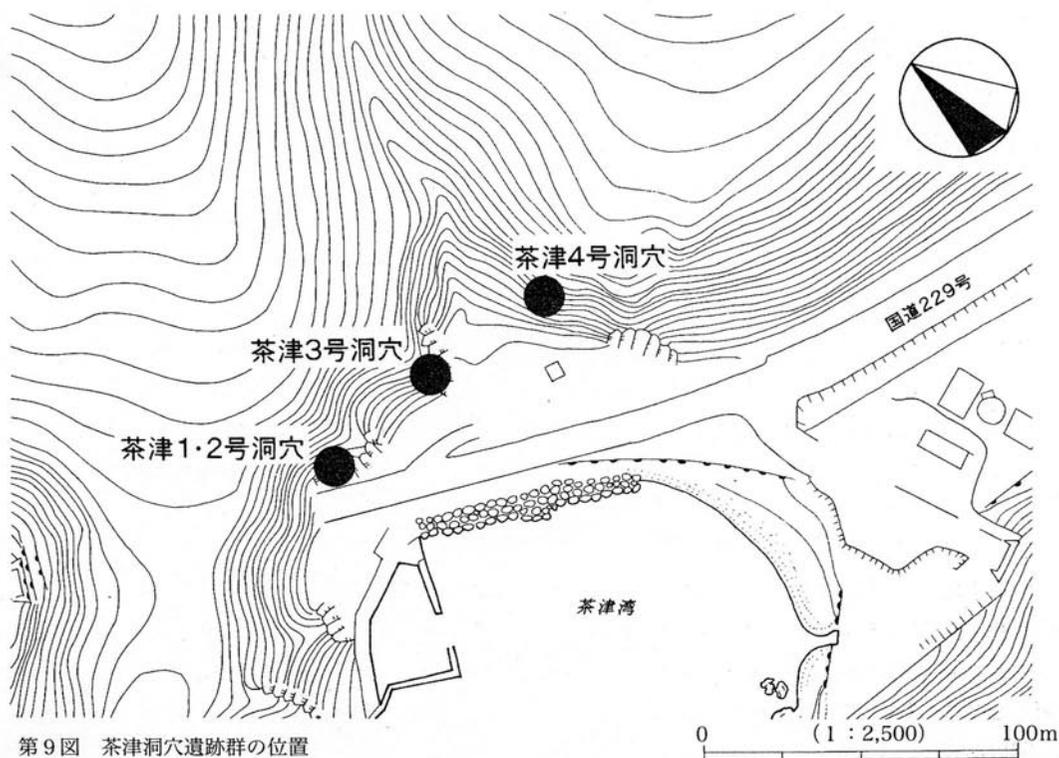
代ほか, 1992)。天井先端から最奥部までの奥行きは530cmで、両側壁はほぼ平行して切り立つ。内部の床面は砂礫で覆われているが、文化層がある可能性は極めて低い。

2号：開口部の幅は800cm、天井は庇状に張り出している。雨垂れラインから最奥部までの奥行きは320cm、雨垂れラインから80cm奥での高さは250cmある。内部床面は岩肌が露出しており、堆積土はまったく確認できない。現状は資材置場となっている。

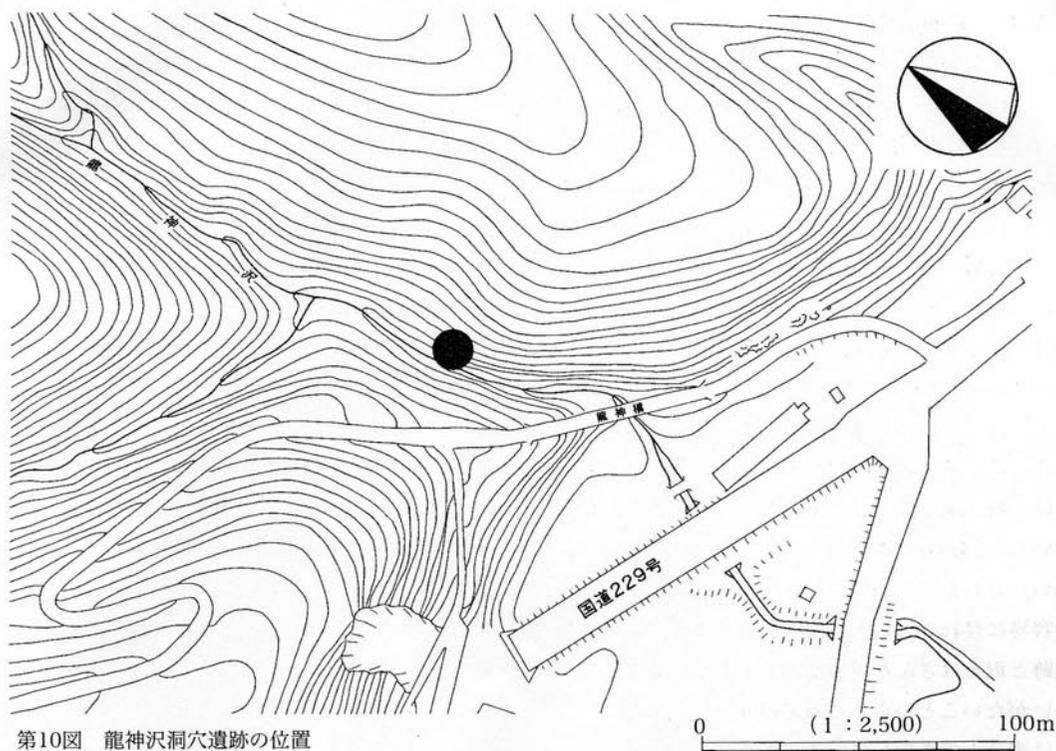
⑤ モヘル洞穴（登載番号：D・14・28）大字泊村に所在する（第1図10）。モヘル川の右岸に位置し、小村菓子店の裏にある崖下の標高約6mの地点で南に向かって開口していたようであるが、平成5年度小規模岩山事業により現在は完全に埋められている（第6図参照）。かつて、アイヌ期の人骨が発見されたということである（右代ほか, 1992）。

⑥ 有戸洞穴（登載番号：D・14・24）大字泊村に所在する（第1図11）。海に向かって舌状に張り出した崖下の標高約6mの地点に位置する（第7図参照）。かつてトンネル状に掘り抜かれて旧道が通っていたが、本来はおそらく北西に向かって開口していたと推測される。開口部は幅440cm、高さ140cmだが、本来の奥行きを推測することはできない。現在は物置として使用されており、現状の床面を確認することは困難であった。過去に石斧が出土したとされるが、遺跡としての使用時期などの詳細は不明である。なお、段丘上の標高26～28mに位置する旧泊小学校の跡地一帯でもかつては遺物が出土したようであるが、当洞穴との関連は不明である。

⑦ 白別洞穴（登載番号：D・14・25）大字茅沼村に所在する（第1図12）。海に張り出した舌状部先端の崖下標高約6mの地点で、北西に向かって開口する（第7図参照）。酒本健治氏宅裏にあり、



第9図 茶津洞穴遺跡群の位置



第10図 龍神沢洞穴遺跡の位置

現在は物置として利用されている。開口部では幅250cm、高さ200cm、奥行きは580cm、入口部から約400cm奥まった箇所での高さは370cmある。内部床面は砂で覆われており、その下に文化層のある可能性は否定できない。かつて石斧が出土したとのことであるが、遺跡としての使用時期などの詳細は不明である。

⑧ 茅沼洞穴（登録番号：D・14・29）大字茅沼村字北坂上に所在する（第1図13）。崖下のほぼ海面と同レベルの地点に南に向かって開口する。内部床面は砂礫で覆われているが、堆積はごく浅く、文化層が存在する可能性は極めて低い。

⑨ 渋井洞穴（未登録）大字堀株村字渋井に位置し、渋井集落を見下ろす崖面の標高約14mの地点に南を向いて開口する（第1図18）。この崖を登りきった段丘上には渋井貝塚が位置する（第8図参照）。洞穴の平面形は奥が広がるフラスコ状である。開口部の幅は140cmだが、そのすぐ内側の最狭部では幅90cmになる。最狭部での天井までの高さは150cm、そこからの奥行きは400cmである。最奥部から100cm手前では幅175cm、高さは約170cmある。左壁部では天井が一部で開口している。洞穴は最奥部からさらに両側に続いているが、左側は土で埋まっている。右側は幅100cmで奥にさらに続いている。洞穴床面は堆積土で覆われており、文化層が存在する可能性がある。住民の話によると、昔からあったものだが洞穴にまつわる伝承などはとくにないという。

渋井洞穴については、右代ほか（1992）によって、渋井遺跡の後背地にある洞穴として報告されている。これは渋井遺跡の埋蔵文化財包蔵地調査カードに「後背地崖面に岩陰があるも詳細は不明（登れない）」とある岩陰に相当するものである可能性が高い。しかし、当洞穴は旧道からの比高差3～4mで容易に登れること、当洞穴の開口する崖面は渋井遺跡と沢をはさんだ位置にあり必ずしも後背地とはいいがたいことから、この記述は今回確認した洞穴とは違うものを指している可能性がある。

⑩ 茶津1～5号洞穴（登録番号：D・14・1～4、D・14・12）1～4号は大字堀株村字茶津内に所在する（第1図19）。国道229号線沿いの茶津トンネルの入口直前にある崖下で西に向かって開口する（第9図参照）。1・2号は双子洞穴である。5号は大字堀株村字へろカルウスの海蝕崖（第1図22）に所在するようだが、原子力発電所敷地内にあるため今回は確認できず、詳細は不明である。

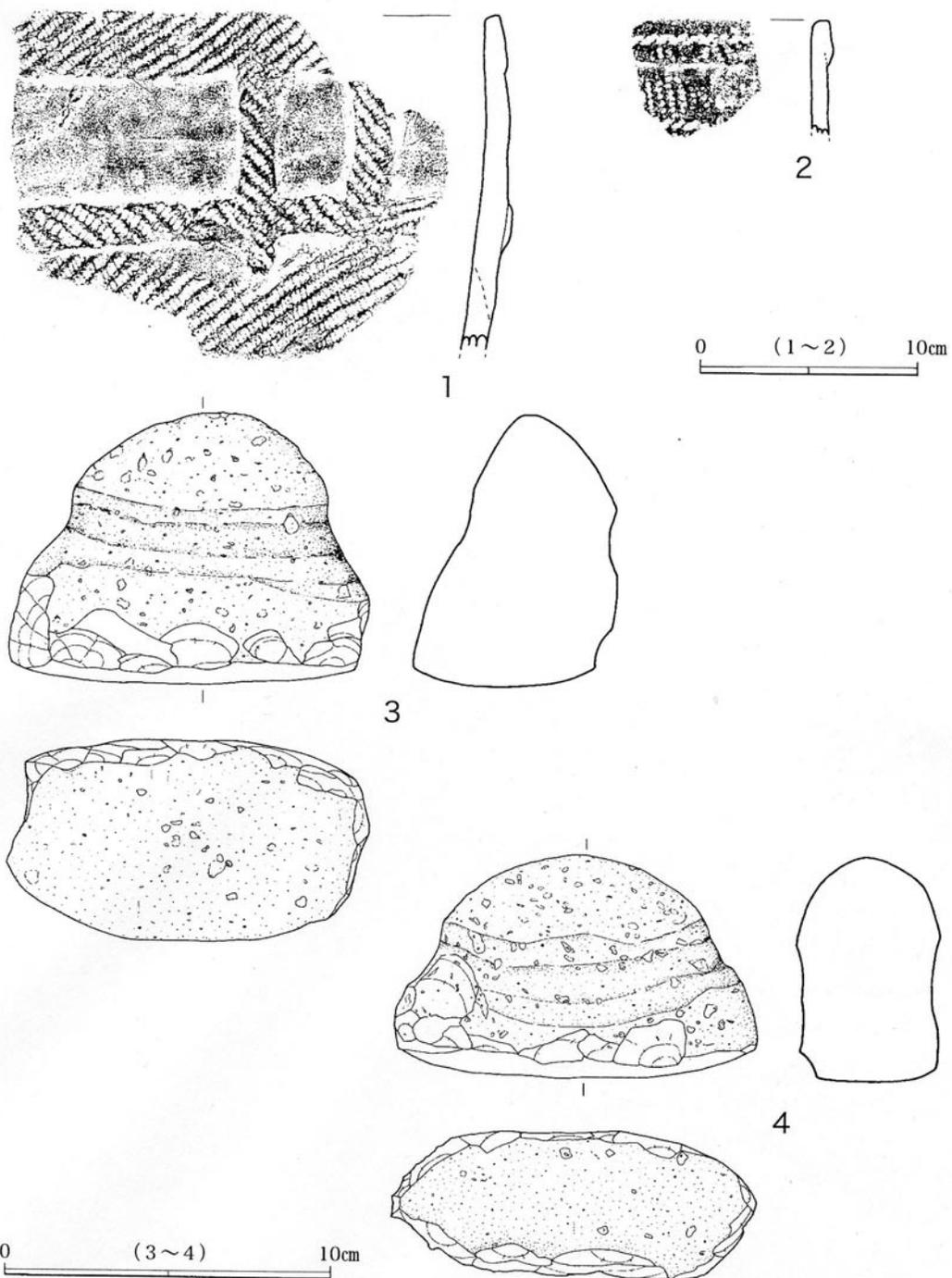
古くは名取武光（1933）による報告があるように、茶津洞穴群は旧来から著名な遺跡である。本格的な発掘調査は小樽市博物館と泊村教育委員会によるものがある（竹田ほか、1962、1970；泊村教育委員会、1989）。各洞穴では壁の崩落や床面の岩肌の露出が著しく進行していた。

⑪ 龍神沢洞穴（登録番号：D・14・14）大字堀株村の国有地河川敷地内にある（第1図27）。龍神の沢の左岸の崖面で北に向かって開口する（第10図）。開口部の幅370cm、高さは最大で120cm、奥行きは240cmである。洞穴床面は堆積土で覆われており、文化層が存在する可能性がある。埋蔵文化財包蔵地調査カードには昭和初期に遺物がみつかったとの記載があるが、遺跡としての使用時期などは不詳であった。しかし、旭川市立博物館の収蔵品のなかにこの遺跡出土と考えられる土器がみつかった。その詳細については次節で述べているので、参照していただきたい。（福田・高橋）

2 関連資料について

（1）龍神沢洞穴遺跡とその出土遺物について

龍神沢洞穴は、1935（昭和10）年に永岡隆によって発見された。「古宇街道から百間ほど離れた場所にあつて、間口三メートル、奥行一メートル九、谷川の水面から一メートル九あつて集塊岩の自然窟」（速水編、1935：3）とされ、土器をはじめ動物遺存体などが出土する「穴居した遺跡」（同前）として報告されている。また信憑性には乏しいが、龍神沢洞穴には岩内アイヌに勝った堀株アイヌが岩内アイヌの宝物であった金の船を埋めたという伝説もある。泊原発建設にともなう範囲確認調査時の聞きと



第11図 参考資料・龍神沢洞穴遺跡 (1~2) と茅沼遺跡 (3~4) 出土の遺物

りによって、この遺跡の存在が再確認されている。堀株小学校の教員が土器と石器を採集したとのことで、この教員は永岡氏と思われるが、遺物は紛失し時期が特定できずにいた。

しかし、旭川市立博物館で保管されている河野広道コレクションのなかに、「北海道堀株村龍神の沢洞窟遺跡」と注記された土器を確認した。龍神沢でほかに洞穴は発見されていないため、この遺跡で出土したものと考えてよいだろう。注記のシールには「h. kono」の印がみられるが、河野が堀株で調査などを行なった記録はみつけれず、収集の経緯は不明である。

遺物は土器片2点である(第11図1・2)。1は深鉢の口縁部破片である。口縁部に2条のバンド状の貼付文がみられる。貼付文の間には無文帯が形成される。地文は単節LRの斜行縄文である。貼付文は地文を施文したあとにつけられている。縦の貼付帯が2本確認できる。口縁部貼付帯上には単節RLの斜行縄文、縦位貼付文と下段の貼付文には単節RLの斜行縄文が施文されるが、一部にLR縄文もみられる。内面および無文帯は横ナデで調整されている。口唇部は面取りされており、その断面は方形にちかい。全体的に暗褐色を呈するが一部は赤褐色を帯びる。2は口縁部にバンド状の貼付文を有する。貼付帯および地文には単節RL縄文が施される。貼付帯上および頸部付近には単節RLの縄側面圧痕文が水平に押捺されている。内面および口唇部には横ナデが施される。色調は褐色である。

1・2ともに、胎土には長石、石英、スコリア、海綿骨針、やや大きめの砂粒を含む。

2点の土器はいわゆる余市式に比定できよう。類似資料は、茶津遺跡(北海道文化財研究所、1989)や宮丘1遺跡(北海道文化財研究所、1986)でも若干出土しているが、沢を下った低地帯の堀株1・2遺跡でも多くみつまっている(北海道文化財研究所、1992)。2点の土器は、堀株1・2遺跡の報告書(同前)の分類にしたがうと縄文中期末から後期初頭に属する第II群1類の中で、1はc、2はdに比定できる。

龍神沢洞穴遺跡は、その立地から堀株を中心に活

動していた余市式土器を用いた人々が一時的に利用していた遺跡と考えられる。今回紹介する土器により利用時期が明確になったこと、また積極的に遺跡として認定することが可能となった。(佐藤)

(2)「茅沼村」出土の北海道式石冠について

東京大学人類学教室が所蔵している考古資料のなかに泊村茅沼出土の北海道式石冠がある。北海道式石冠は縄文時代前期～中期に作られた擦石であることが知られているが、茅沼地区で当該期の遺跡の存在は確認されていないため、ここで報告することにした。

収蔵品(第11図3・4)は、3が収蔵番号PA・6・2、整理番号6409、4が収蔵番号PA・6・2、整理番号6410として登録されている。収集された年月日、遺跡、経緯などは不明だが、両者とも「後志古宇郡茅沼村」と注記されていることから判断して、茅沼地区で出土したのことは間違いないだろう。

3・4ともに素材はほぼ共通し、安山岩製とみられる。ともに敲打によるしっかりとした溝が把握部にあり、使用面は平滑に擦られている。底面外縁には打ち欠き痕がのこる。3の断面は左右非対称で、平坦面とやや張り出す丸みを帯びた面が形成される。把握部の断面は三角形をなす。4の断面は左右対称で把握部の溝が幅広く作られている。頂部はやや丸みを帯びる。

泊村内において北海道式石冠はへロカルウス遺跡(名取、1933;泊村教育委員会、1998、など)、茶津遺跡(北海道文化財研究所、1989)、汐見橋遺跡(泊村教育委員会、1999)などでも確認されている。それらのなかには共通した形態上の要素をもつものもあるが、包含層出土のものばかりで年代の明らかな類例はない。そこで、近年発表された小島(1999)の分類に照らすと、ここで紹介したものは縄文時代中期の道央部に分布する類例にちかいといえる。(佐藤)

(3)天売島出土のキセル

第12図に示したのは2000年10月6日に天売島で採集されたキセルの雁首で、2000年の秋に我々が行なった天売島の分布調査に際して得られた。こ

の一連の資料は 2002 年に報告を行なったが(福田ほか, 2002), このキセルのみ漏れていた。そのため, 今回追加資料として報告する。報告にあたり, 原祐一氏(東京大学埋蔵文化財調査室)の御協力を得てサビ落しを行ない, 御教示を受けた。また, 谷田有史氏(たばこと塩の博物館)にも実見していただき, 御教示を受けた。

採集地点は天売島和浦集落内の三浦商店裏の畑である。海岸段丘の上に存在し比高差は約 10 m である。ほかに得られた遺物はない。全長 4.9cm, 火皿高 0.7cm, 火皿直径 1.1cm, 小口直径 1cm である。器壁は 2mm と厚く, 重さは 19.95g あり, キセルとしてはかなり重量がある。採集時は茶褐色の薄いサビに覆われており, このサビを剥がすと青銅色に錆びていた。サンドブラストで数ヶ所サビを除去すると, 光沢をもつ白銅色の地肌があらわれた。サビはごく薄かった。

形態は直線的であり, 火皿は小さく台形状である。中央にかすかな段をもち, 肩部を意識しているようである。溶接痕はみえず, 火皿と脂返しとの接合部分にも溶接痕はなく, 細い沈線があるのみである。接地部分が平らにされており, 安定よく置くことができる。

直線的な形態であり, 火皿が小型化している特長をもつので, 小泉弘氏のキセルの編年(小泉, 1983; 2001)によると 19 世紀以降のものに相当する。江戸時代のキセルの多くは鍛造により製作さ

れていたようであるが(原, 2000), この資料は鍛接痕がみられないことから鑄造品であると考えられる。器壁が分厚く重量があることもこの想定と矛盾しない。また, 白銅色を呈し, 江戸時代に普遍的にみられる真鍮製キセルの黄銅色(原, 2000)とは異なっているため, 素材も別のものであった。こういったことから, 年代の特定はできないものの, 19 世紀以降のかなり新しい段階に作られたキセルであるといえる。明治期を中心に若干前後の時代にはいる可能性があると考えられる。なお, 神恵内村神恵内観音洞窟では形態の類似したものが出土している(神恵内村教育委員会, 1984)。

北海道出土のキセルは森秀之氏によって分析され, 明治期の資料も示されている(森, 1993)。天売島出土の資料に類似するものはみられない。製作方法や材質を含めて珍しいキセルといえるため, 今回報告するものである。(塚本)

文献 (50 音順; 発掘調査報告書の編著名は発行機関名) 麻生優, 2001. 日本における洞穴遺跡研究。(発掘者談話会編)。

荒牧重雄, 1970. 地学辞典。(地学団体研究会・地学辞典編集委員会編)。

石橋孝夫, 1996. 第 1 章 調査の概要, 第 6 節 堀株神社遺跡の地形の形成, 堀株神社遺跡発掘調査報告書。(泊村教育委員会): 29-32。

右代啓視, 赤松守雄, 山田悟郎, 1992. 積丹半島における洞窟・岩陰遺跡とその地質的意義, 北海道開拓記念館研究報告。(12): 93-106。

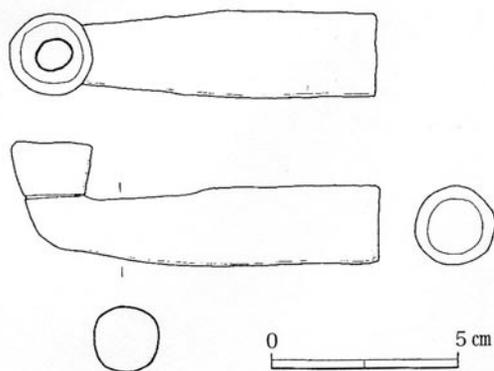
神恵内村教育委員会, 1984. 神恵内観音洞窟。

小泉弘, 1983. 江戸を掘る—近世都市考古学への招待—。柏書房。

小泉弘, 2001. 喫煙 2 煙管, 図説江戸考古学研究辞典。(江戸遺跡研究会編): 189-190。柏書房。

河野常吉, 1905 [1984]. チャン即ち蝦夷の砦, 札幌博物学会々報。(1-1)。〔河野常吉著作集。(1): 18-34。北海道出版企画センター。に再録〕。

小島朋夏, 1999. 北海道式石冠の分布とその意義, 北海道考古学。(35): 47-60。



第12図 追加資料・天売島採集のキセル(2000年度採集遺物)

- 竹田輝雄, 1984. 積丹半島先史学研究の覚書, 河野広道博士没後 20 年記念論文集. 287-298. 北海道出版企画センター.
- 竹田輝雄ほか, 1962[1979]. 茶津洞窟-積丹半島調査報告書-, 小樽市博物館紀要. (1) [茶津洞窟遺跡群-積丹半島調査報告書- : 1-48. 北海道出版企画センター. に再録].
- 竹田輝雄ほか, 1970[1979]. 茶津 4 号洞窟遺跡, 小樽市博物館紀要. (3) [茶津洞窟遺跡群-積丹半島調査報告書- : 69-86. 北海道出版企画センター. に再録].
- 千代肇, 1965. 北海道積丹半島第一次調査報告—古宇郡泊村照岸洞窟調査—, 先史学研究. (5) : 1-15.
- 泊村教育委員会, 1985. 渋井遺跡発掘調査報告書.
- 泊村教育委員会, 1989. 茶津洞穴遺跡発掘調査報告書.
- 泊村教育委員会, 1996. 堀株神社遺跡発掘調査報告書.
- 泊村教育委員会, 1998. ヘロカルウス遺跡群.
- 泊村教育委員会, 1999. 汐見橋遺跡.
- 名取武光, 1933. 積丹半島の遺跡と遺物 (其の一), 蝦夷往来. : 頁ナシ.
- 野村崇, 1992. 積丹半島における考古学研究の進展と遺跡の概況, 北海道開拓記念館研究報告. (12) : 69-92.
- 速水誠一編, 1935. 先住民族の洞窟を探る移動研究会, 岩宇郷土研究, (2-5) : 3
- 原祐一, 2000. 近世の金属遺物, 加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡 (東京大学コレクション X). (西秋良宏編) : 96-101.
- 平川泰彦, 1992. 泊村周辺および積丹半島の植生, 堀株 1・2 遺跡. 北海道文化財研究所調査報告書. (6). (北海道文化財研究所) : 673-689.
- 福田正宏, 高橋健, 高瀬克範, 塚本浩司, 佐藤昌俊, 齋藤瑞穂, 山口大介, 2002. 北海道日本海沿岸地域における考古学的調査 (1999・2000 年度), 利尻研究. (21) : 93-130.
- 北海道開拓記念館, 1992. 積丹半島の自然と歴史—自然編—, 北海道開拓記念館研究報告. (12).
- 北海道開拓記念館, 1993. 積丹半島の自然と歴史—人文編—, 北海道開拓記念館研究報告. (13).
- 北海道開拓記念館, 2002. 第 55 回特別展「洞窟遺跡を残した人びと」.
- 北海道教育委員会, 1983. 泊発電所建設に係る埋蔵文化財包蔵地確認調査報告書.
- 北海道文化財研究所, 1986. 宮丘 1 遺跡. 北海道文化財研究所調査報告書. (1).
- 北海道文化財研究所, 1987. ヘロカルウス遺跡. 北海道文化財研究所調査報告. (3).
- 北海道文化財研究所, 1989. 茶津遺跡. 北海道文化財研究所調査報告書. (4).
- 北海道文化財研究所, 1992. 堀株 1・2 遺跡. 北海道文化財研究所調査報告書. (6).
- 森秀之, 1993. 北海道の遺跡から出土した金属製煙管の実年代, 北海道考古学. (29) : 57-68.
- 山岸宏光, 1979. 積丹半島西南部の地質と火成活動—とくに層序とハイアロクラスタイトについて—, 地質学論集. (16) : 195-212.
- 吉田東悟, 1891. 北海道美國に古き跡尋るの記, 東京人類學會雜誌. (6-64) : 362-366.